傾城買四十八手

中島氏

四十八手叙

千手観音の。義経をさ
ゝ奉る。たゞの
一度ハ。一ぢ乃まにぬ。弥をも
とつて投げのけ。軸も足ら
ぬ。翌年。

つぶや

於ばそさすも大江山乃岩鄰
塔ゝものゝ中ゝ
紙雑も宮乃花よ居ぐぶ
の出いを表も理ぐぶ
仏様を手あすもあ
ぐ中ゝ故乃我

手を拭て。真影を
十八手ゝ。昊を
家学ゝ乃愚國中
教ゝ。我乃ゝ雑
なるかゝ。仏一
冊ゝ八ゝ

八物語

山東京傳述

寛政癸卯

成孫其

文京

秋月の巻

曽我物語

曽我の庵

慈界之
仙都
昇平之
樂國
京傳

傾城買四十八手總目

○[illegible]
○[illegible]
○[illegible]
○[illegible]
○[illegible]

山東京傳著

○[illegible]

[illegible]の産出。そ手八十六りれど大ぐらにえいろてうろ
ふこだれ髪いろのぶゆ八百ゆ[illegible]
のぞくふそ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

きつい待とふるぞ忘てくれめへヨ　客　モウそふやァィー

たヨ　トいふ床のとりそうとそろへてとちぐへてとら
せてふとろとゐる。これハあまりかまハし屋女の中へむ
つじのきめへ入ねへやうにとの心づかひ。このやのきまり。大のも
てとゑらるあり　客ムスコ　年ハ十八ぐらゐむすこらしくて男
もよくあまり口をきゝらどいうふりもよき所のむすこと見え
る風俗つれも一人あり。床ばかりさきまんでよいつぶとんのうへふとん
とりそろへてまくらふとふたりあぶり　女郎　来りてあぶらし
の中へ火入しのされで行ゝ出ていらゐへ　そろふかう紀

ろうく
さとうり　上着とおとんなんせんえ　ムスコ　アイ　トいゝさぞ
うり
ぬく　女郎　さんで床の
乃のまをき　ねしやァいろそ気がつまつらん
モヨ　ムスコ　なぜへ　女郎　だまつて　おらぞ　りん　さいろ

らサ　ムスコ　そんちや何ことしつてよひかの寝ん
あゝやせん　女郎　うそをおつきなんしねしやァ
いろそもがなゝんしゐるヨ　ムスコ　もとゐらね
二ヶわくさや　おゞざりやせん　女郎　ふくらしいの
たつめりてふよしさが。ちんつるよしてづめろぞ。ただこ
もひ　する。火さちきへかしてかし。ぼとたく　〆ふろ
きろ　女郎　火へと入てきそてくりやよくいけてヨ　〆ふろ
アイ　ト火入をおゆく久ぞ
ごれにくありより　あらきい女郎　おさのしまさんさね
女郎　きさんされ
どろざと　なんさんもとくちんともきさくん

せんとちらーあつそうとうらよわどなくらみろ【刻】ヲヤ
ぶんへのちくとまきみうーあがらおちてる
てめくゆびとどかしく【ムスコ】貴よ中の町て六
ちうはちうきんしくヨ【刻】それちやいそぬくるう
よコレヨそれよそうてモウ たや伺うとムやを
くちめくヨトわどけかる【ムスコ】うちんいて居る【ムスコ】うちんいて居る
【刻】コレサ ちまくとちまんてのそーて云くて
モウ やとそうや トムーかうどいをぬき【ムスコ】アイ そん
ぬへてむうそと紙へ
なうお体なそうイートそうくひやーいうう
ーいつ紙へ紙へ

コロリンピヤヒ トある【刻】ちどうにしやヨトおえへ
ぶんりよやそうどこちのいかるたうとくそのあうそ
ひちちのうわとつくくぐとんてこねうーちあんどーぷぐのく
ふちちふやる【ムスコ】こうちちやたどこいふそうひサ【刻】
わあんなんせんうくモミへぬーれ内い花菊さん
の客人のをかく【ムスコ】イへちどひやと【刻】ど
こざんとく【ムスコ】神田の八丁堀サ【刻】うとおと
つきなんーよくそどうーなんとヨ【ムスコ】
でちとやと【刻】あ伝くれよかうんをいんく

ゆきそうせなんしかみいひあんせんとくそぐ
つらんとそよ【ムスコ】いくぐどもいくどやァぬくりひと
そそひのさ【ヌ】わんふく【ムスコ】おりくあてそうか
【ヌ】そんならから字をいろくおそうせなん
ー【ムスコ】から字へかのじさ【ヌ】まちらんし
よかのドぐねコウトそんちら日本橋久
【ムスコ】そうひちぐんそねぐ【ヌ】ぐんぐてそんるみ
かんしくやらく【ムスコ】いんー【ヌ】ちぐんぐ

こぐのうトうんぐで【ムスコ】まんくそそくで【ムスコ】ゆりりんとうい日
ず橋のを和西の屋サ【ヌ】ソレこんなんしよく
あてんーたらうモシへ日本橋へもかんのんさを
を毎ていきんそそく【ムスコ】ちまてことサ【ヌ】大くそ
肉ふいおりそさんぐこぐんせうね【ムスコ】ナアニま
ぐそんかりのぐりのるりのぐ【ヌ】そんならどそ
ぞの女ーしーしぐあんあんそぐこう
ね【ムスコ】肉ぐゆうまーくて出られぬうまんち

のやうなぞくいきてきるのいねくのサきてよねん
とりれまちのうりにつまげあつて（ゝ）
いきやたらちげるのだりいまぞとるお
めくのいろとちろと世りくきりせナ列どふ
してそんをるのげござんをりのうろうちやち
年まで三の日の寿りゃう、あるよのんして出まうでん
しょいろとちさくんてもうちちげやうお
りのへされもしてくまんせんりのと云よく

うそ紙つくれうそんにきとつけやせう列
りんざんをよ云そんまうる宮よわれさのげ
あるざらう列人よわれるのいきくひサ云
そんなうそんちちよへなをざらうね列
ぬーふくトうをひ行いヤンをめくトふそんのをくく
ひねうてあるる云ざらーなくるね列モシへうちや
えうさ一ッ孫うひげござんをよ云どふう孫
げひざ列ろんちげわまさ宮ーわれきなんを

やうあさ　おめ〳〵今かれさのいぬといろ
さとや　ゑ〳〵ら　たんさひとりござんそよ　今
うらふいるすざのどこのんざん　てゐる　今
コウどこのんざん　みまさとりひさ　今　でんぶ
あやかなさるりんざのどきぐ　りんでござん
そよそれざれどうさらぐやうかりのざら
りうこそぎりでおいなんそめんぬ　今　りんて
へぬおめんのやうかうくしひかぶしゆどりの

と　あいさたゞ　サさんとおかぶんなんし
今　りんふサよんでさんんなさるたらくる
えさ　うそや　今　きさらどふしかさる
　ざろうん　今　きそどふ　マアうそよ
もうまてうざんそ　今　それぐうそぐ　今
りんのるサ　今　どれりんうそらとざきひ　今
　モはあいぐかんよちりんしん　ト呈でメつける
のあたごとうよさせる　うまさちう
とちさこ　ゆるかぶ　今　今夜いでんぶさむい

ぢんざ ゲイ〳〵いってもよりく（トあるはしらをゆくい 早ゲ〳〵のこれいろく
よりでどあでこたり百ゑゆ ゆきさろろさ 男 ろろい ささぎやま
家なれど ぢろい大のぢんうなり ろろみのひぐら
よくお出なんしさねサアおをいんなんしかぬ
二丈 そんあら一ツぷくのめれ ろろくさ
トきを 男 たたをつけ ぢ出し あくおあぐんなんせびいねね 二丈
伺さてぐよれろぐサ 男コ へんなせくふぞト
アをい 二丈コウおいろんうちが ぢぐんざぐらかを
いぐってろんなせく 男 いろを ぢ ろろろろちと

ぢらしてお出なんをよ 男コ 伺ろんかろうちが
あやかされるのさ 男 ちょんとこなんしふら
しいトきをでぶろ ぢろしねーがお師しゆうさんざ
くらくまぐあんなんをぢぐさ 二丈コウ 業さん
おめくかざアいまろくらぐアぢいぐんくいねくお
いらアモウおいろんざぜざいいちろんぐろるく
なんって一ぢぷい呑（のむ）とぐんろと稼るかろこれぐやア
傾（クズレ）城ぐぢるかぬくぢぐざ 男 ヲやあれろぐ義菊

さんぜおとろーなんぜべよのふざんをいま
ナニサあのけいこうちれ畠でさんぬ女
さモウさやせんぬ男かさをふをんかつ
といひなんさをかいつはけんさよ
もいくのさこういちやアおらーらしいがこ
百六十よりん日は里へ帰りこまんて屋
ふにツを鷲のたこがでこびろうどれさん
ろりが新へかくぬへと移つれぬへ男トをあー

ふのりがさてさもるの火ふのひさおちさ
とさくざてさりくその上田の小神りる男孫ソレ
火がおちんしさ同名ホイトけしくざろう女のまの
トいよりのざらりレ左りの目がいどくとさい
つァさふざかさろるざさうがへて居るからさん
ちくとよふあやァ傾城もアむづらしい
のサトうねがさやワるくさるる男あされてざ
あさりをさくさてい男まりさて紙
とふよりふしさ屋のちみいけーさつぐさ同名さ
ざつはけてしやりざんしーさいろのさ同名さ
つひさふしが出くたつさ出ろ居いやがれい

うおいらんお徠之下 ヱコ マアあそびかせ
ん 二月 いんよやてんが紙かくなんてョとれよ
みらァいゝがおめくいちりん〳〵よく けらざァ
うらゝらうふよ 会コそよさちつともよイゞ
よふござりやと 男 そんれーややうくやく モシへ
もちつとおそかしなりんゝおそうおゝあヤン
ちめく花菊さんがお去くんなんとざらう 二月
そふいよ和も時くちさ 十次のヲ やだんそうえん

とちめ白川ざコリヤアア 紙そんよりうりざ
りんトあんごうれそぐくよりてそらせんの中 宮びとへ
てそちきよりさだ出りあくんふりちりとるいき
中のちれ
くけい チヤントセツま 茶や男 ハイおむうひで
ござりまして

評 曰 右のおいらんがたぐこれ出でむとこ
の部をうんゝ保氏芸巻の意味ありく
とくゆうしけくねのぞんいまざり
まやぐんとうぬとんぐりてんまれ

てもゑでたるの思ひて居るのなり又
ぢんとう却ぐら今青へあの客人よそふ
くいろて薄白とおさのさなんーといひ
をしてもつひをそびきていそどそよちま
ひぢんとう却ぐらい沢の引にぬて居て姫
紙笠耳をアあれをるーにとりつひて
いひ出さんーゆきびよいふと考とりむい
度くなるべーちーまるりちんび

内徳のせいもよくはもれ新造出し此頃
不と紙も今れ月ならん又今時の小むを
こいとろくゆきすびて毒きてどろのあか
ろぐは害いそれがなく如に思ひはろ
ろ風なりまとふひとりくみるどが
浦山ーれあそびなり或人曰おいらん
ぐ中間の仮宅より居る時モシへ下へ天気
ぐよくてやどふも中間いかえを

ヨトいひーへなりかゝる御なり〳〵と
かくけいせいあどけなき紙しゆうび
ちべー

○やもとひま 宮へ山のまれ通ゆいふ
ん世の弁義おなし別係

宮里風 二十二ニさらやきびらうどのゆうふもやーひさ
いとのゆうふわきあげいろきみのろろひわど白く
まゆ毛ろそく繁りくゆひとさんとまるさ田うん宮
じゆうれちりめんのあいびろうどぶうらろり紙にこび栗
さや帯ゆへさちよ糸のうちふあげなぐらでこせこ
味せんをおかゝひいくあるゆくゆりそでーんぞう
同衣 あんさろちりイせんトあんでーしくらうら

をさちとあげてこりうち里風 びんろりーしさ同衣か
ろうちおさんてうちろうてあるらうりあんろりけんちてろか 里
ろうろうてはろんーたくぶれど 同 モウとぬくそあどめんなんーうはて
里風さんよくお出なけんーしさ子モンへ紙をを
ひいておさろはたんーみ里いろあんまちよ
つと姫つのてうらひぶ同ヨヤおりてくさせ
るどのウトあんとろん巣他をとぶて里 をげふさどつ
てあそりーんろて同 モウ上ろうりいろ
ニろちはろちのむ同 ○ 女郎

[illegible]ア　トわどこーま髪きうまくひこひ大きくひきまこう
[illegible]　[illegible]ア　[illegible]ていろまくやせくちあ方のかびんへば
つうれまぢるいのうみさそうり富沢町仕へのこび糸ちりめんの
[illegible]へのさそもやうれ紙ふたりあくくてぬりせさるさもぎ
のふ紬とうらうりふーぬとうり　イタコぬーとうくーた
ふうんぶん入ふとうらくうまて
そのひのとうれどョどうらひひても後ろ乃紙
トウくコ　紙治やいけそふぐしひぶまるき
めくそよトきんーうあうをうりなそう
ぶきやア出もむうてとうぬくぶろぬくッちゃ　これうやあの
ぬくヨコウ　里風さん角花さんぶよくいってく

きッサ里であくうんてきさナアなんざうめく
りのならうれろくうの矢　サアうひあんー里お
うきやアぶれ温石ろおらァ又餅ろと井のつ
同ろ　あくぬくけびぞうざァトきんどの出ぞ　ろ
ぶねさんきみとぶちをひきよせてうんなんー同アイ　ト之
きんドのまくだ里でくぶこのろいめんくぶい
うらうりきて
か蓑のふぶいきうふけちんーぬくな同ろう
とうぶひんと里それでもまぶ清いうけめく

そのくしもやうまちんつまあうを出さとのう
引きあをなんまちかぐんぐんぐうりいよ里コウ
ちんちん酒ちんあれやう引酒とびよてちや
づんちんせびい里やがをいよぜトウその硯
ぶさとうんせや今年ごがうも久しいもんざ
ひ鍋のあんちんつて居るぜ蒙螺のつぐん
赤辛螺を入てざとかうあそれらァちんざ
の料理ちんどもけちをすうせ引よく

いちくかをけをいひなんちよ引そんなら
丈分けを出しんせうう長さあさんそんちう
とんてちんなんー引りぐぐみちちまちぐ里けあ
てそう そちんちよくつつさていなんざそぐ
かちさいつもまんぐちでぬく去うー兄とく
ちもそちちまめいあ糸づけそぐか血のか
そぐち出るぐぐちう引サアスそぐまんさ里
そんちよ兄ぐちうよアさくぬく去ぎをそうか

やアやアやかトゑいぎいやアそのひのゑみのあと伊
くくちんさん紙へきつけて伊のまんかつるーて
とくくりにやらくくーまんづくーよくくくるみのくくりのく
くちくくらくくんとくりてくりまやアつけまへゑもなり
同モウ移んーくくらう同マアア子どもとやくつく
くんくくんなんーくくてついでよびぐんくあと
同アイトみくくやくく同コウおめいくくぢうゑき
てくくんくくとくくちぐけむくくくくくんて
なんーみくくせぐされちんさアナ里くくうふまげ
てあらアア同フウくくれでもおくくやくちぐけちち

なんーたくぐくれあんたぐらうね里マアくく
へくくれ門のくんひらぐ同くくあもどやアあく
せん里くんなくくはでくくとくくけくへどめぐぐ
同おくくアいやくくりやアいくちぐくれとみくり
よくくくりぐ里ちくくれやくくりぐきくくてあき
くくくくアいやなくくくちくくもやぐのもくぐて
めくくくくやアくくぐいナ年ぐくくくとくくてもくん
あくくれぐきくくれぐくくとくくれつくく同くくく

つさうろうしいゆぐさ　ちやらんへらみとあてへ
の引出しれ書屋とでくふこのごろいとやらう分同又
ぬーあけてこて居らうち里　たなこ盆
さぐーるすを去なんもそよこーなんートひろる
里ちんとうをろくつウみんきよさんさアぐ
うさこいろア　ぎのめれ居じゆう者ぐらく
同ぐれでもいうちゆんてとさなんー里ウ
きこうさんぢう糸菊ぐ居代よ出ぐ色乃
つまひ向奥のゆうきひ強河細工の西地呂

色ろふつろけれあやぢら同らんみんーてやん
なんーそれでも家屋づきぐきんさア　ぬめく
ありやア　きんくさ里家やづきもそほ
いおりさ大さん者　めくら田町ぐらうぐう
てろよ高げくぐか同らんぢうも居ぐけ
ふとさぐでくぐまグできんーさらうちんこ
ひげなでさ里　ちりくもその色でまぐで
きらやア　作和やーきのあんどんとふのぐ

ゐんとでるいひなんーいよゑーどくぐい
とのふりのざくら 里 なんざもそぐひざ ゐらぬざ
といそぐどとさてあんしーそのかくり小づくり
まで気とけてくれんさァ 里 こいつァ中り
ろ 狸(たぬき)ざらんとかりやう ゐらまにもちんせう
里 さぞかくざらうるそのつらでかいてん
せらやァちんくどのいぬざ ゐらいけぬくらち
ざよ ト次ぎさのゐざをを 里 コレようせんちゆきる
ゐらんくらきくける

多人のトムエ又外のゐイぢうまりえしやーモシヘ
くらくれァさんちゐくらわとざておらん多ん
ゐら なんざナ ちくさていひなんるゐ羽織へとべ
ゐくらのぬちゐ多ざさんぐぬどでおあー
を一トそどかしておんなんーあーしおくト
ナイスとさゐら久しひんざよちらぬくト
いひなんー ゐら そんなちそよナイしやうトゆく
里 コウでくぐ史ぐおうんさのわせてゐらイ

ちぐらとりうつとそうちくよせてうりや
ざぐらーやのうちアうんとうるやうざ巖と
ひゆうでうんさと呂うんておごろぜ呂ろはうら
えんくまれさそのぐらちうとだまんなんー（ト次ぎ）ーでつ
くまねとうるわうちうと呂（いろ）系（無）ておりていろ白うて
ありれ彩教おの如く　いもひうひうたうのうまぐ
あぐらていうさ繁昌いわれさ客の為て髪をゆつうよく
うるゆつたり中おうりのふすあとあけうれとまぐんむー
里風さんでぐぶさんなんをね里客人ら呂（いろ）アイ
サ里おりうさ呂（いろ）おうをれんをねをしちう

とおうんなんー（ト次ぎ）ーつの系うら系うんとおうて　おてうん
ぐんーおいトほとつ呂（いろ）呂（いろ）ひうとれむうてぐうとぐ里うまぐこ
のゆうさぐまとおてむしてゆる呂（いろ）こんやァ又おめくぐされむうぐうと
きく彼ぐゆつ五くうんうさの里むうとぐうこぐや
アぐぐぐくぐんアうんうちぐうぐうとうくうくうくとでうく
ーやうて呂（いろ）こいつアおうーいうめくのうとうう
やつさいぐううさうーぐさ呂（いろ）ううふーいせ里
ぐよモンへおあ呂系うくぐうりイうを又おーぐや

まとやらたんれんを里のりうこういきあめくみわざを
かるれいをろうんらざとといひなんをのうくぎろ
いあくを続くと男くどもだまされて咲宮の
ねさおやをみなんーしとうちをと引ちろうさろく
らげんよろやまをやいとう小寺でいろいろこいとうりこえを
ふておりてむさいろう里あのろめくらびもかづのこ
くくろえいやわるー里
とさやでみくとろんくらびざ引あんまりさるー
なんをみおめまほれてあんをとろさ里毛まら

ちぐんさそうざ伝のあれて居りあんざ引ほ
ぎくみりやア　とぐんとおめくもれて居
なんをぐらう里あんのほれさのれれくのく
どうを兼れ話をが卵塔場で小をとりやアー
めくー引それでも糸菊さんよおめくとろも
つてくろろくしひんくーさあつるーひ
のう　なのの子ぐ小男あ屋の脚さんくろを
てちぐらをさ　のくみりろうさけあん

かきてさあうるあ江戸わぬく里ほめくの枇杷
茶湯へ招くあけて引ひらひらァ口ひろひ
こんてとてさがんの客人なぎァとんてこうず
あんせん里どりでもづもれ吉よとぶさを
た引ありやぎりでもこ色さまざ小倉の
吐き里それんろりう一まいざうせらに伺が
出ようもこれぬくそれどりでもすれく
こでは江戸がりのハならァ出ざいの芋をとろ
てみのらばりしていさじんらこれぐら
らくこれぬくそぐざ引きりイせんこうモウ
びとあてらこ移るん出んろ里ヨやちよ
つとこやあくのうれへなんとふざまご君
こもこれぬく酒をこらてひてくとこやに
戸絵巻の川こよさらとざてこらぐや
つさ引こうおめくらこらがくこびをやァ高
うあらァりうさんく移る中よ里ホンニのこれ

ら　ぐうんとき　うわくてるくぐうづとこる
やうにはよく　移てだんりり居るぜ　ト　これより
おまて　「火の用心さんしゃまきませう　二ウい
の方　とまらんしわれまうせう　ト　夜まりれ食ぐう
えんくくかけはうつる　のまさくワうり　行ってを
ぶのうちもいうなるゆめをひらそびしやるれ　敷のうど
らくわぐうく　夜八　里　相とさいうアうんざ　祢と
からりとなりける　里　相とさいうアうんざ　祢と
きれさ　「うら　脇さうぶよ　きざちやいりをそして
やうそうざ　里　からまとうやアらんちきだ　ト　云
まへ　ちのうら　用をとそそうり　「うら　だれぐ　鍛　ニうコウ　ちうら
くそそて　まる　「うう　アイ　ト　めんどうら　ふ
うてうりや　「うう　アんさよ　「うら　い　居つづけびよりざのウコウ
アんさよ　「うら　い　居つづけびよりざのウコウ
見ひきんてみたんし　な　里べらがうめゆめ
うりびうりがそひてあきれる　ト　ふきあくりうひ
安ト　弱をとうてゆ　ひ　中れ丁と云おがーでびさらく
とあうめけ　云りん　坂と　出　ちのよ　傘をかり
ちをうとぬひでかそうく入れうりを
ぐうとそそんていうさんよりかそ
「評」　曰　うちうちうちぐれ　家へ　如　扉　とひいてのそ

ぶとのこゝ色四くさぐめ紙舎あぞみもえん
ゆゑれ長絹くら髪の上とかんでかりまこと
一ねのまひこそぐとかくるゝあドれからんで
ゑりはあかしてこゝ引こゝめくりや樓引
のりこてかまこぐるなり又これより一ざん
ひくこやくらへ紙屋や土弓場なぞと
こんこてこのみとするなり或人曰小こんせ
の女房い紙舎なぞれこんちやぐども

の付いてるやかまやしこの顔屋よりこの
ところぐでがくりとこゝろりのなりまきへ小
みせよ長ゝをこゝらてのまけをこゝなり
たいぐのかこひてこゝ角こゝとこゝ
○又ぬれこゝ手 問い大こ世宮い京中りの女へ
紙屋ざこゝ名代のあゝ夜
まこゝとこゝれやくこゝいかくこゝくこゝふんこゝてこゝやかおりこ
の髮あゝまれ田中いこゝふんくこゝは川油でかゝゑ中こゝぎこ
油でこゝぐれこゝ下長ゝこゝりれなり元今の入こゝんりこゝれ
こゝぐれひこゝこゝびこゝこのでむこゝび家のこゝかくこゝこ
なりまこゝくこゝびれてたぐこゝのくこゝあこゝんどこゝれこゝくこゝを

よんで居うち夜中ゆうべ
いろ〳〵あるあひてさ女郎たちぐらゐ色
りうそくとせひうくあさぐろひが目鼻ぐちよくあるれ
屋やざしれふしていうつうりのときやく もそうさうみ
みてめんつされお家へひくぞそれ色く紙のうへもよみてくぬ
うちぐうへらりめんの紙ぎうれむくみひそちやちりかんの云
ごきをしめこうなゆうをよびいかうこうちすこあくそく
らうらよりかくまれぞうつまとのちのさとこの伊ゝしり
ちんつきやくげのうべとうりちんとざれく
きてこいぬうよのぞひてとこと山女郎こうけでくぶいて
いうぐ〳〵よ山コレハ山さんきやく人うへトひやうぶのうちこの
ぞきこれへぐわぐ深者さ夜でへぐぐうませんう宮
うぐどうりできひさやうお望ぐ〳〵ぶうてさ

こく山いとだめんなさりまゝ先おひさゝぐりで
ぶぐりまゝて変くお出なさうあらちんと
おちらせなさちんていうさりませんでおう
らゝでぐざりまゝそおイスあをこくさせろ
づくとおさ山りんぐうさやうぐトこさやうひ宮イヤ
ぐつふちぐうくこたんぐぶたのぐろとこう
けぐめこのさちせつやうまゝひうら山ある
わぐいづれみアいくく トつきもうひあで
そうこゝひきる男 めこ
きのつ

そこあのぶいもの　伊のといひ外てまさらちめあ
らかくひきさどりづらぐョウ　トいをとーちうこうて
又名代の者共へこうぶ
「さいこ」　ちぐとかく　イヨくかんちゆくく　トまさぐらり
ぶひなぐら
とちよこんぐんいおひーりく囲ひぐろい速れ
へ一切ろいのさ「さいこ」コレハきろいもシひ女ぶれ
もまいまんとちこんでぐりまとマアい
つこい気ぜんが姉さそてかの京町へ囲
ヲイコリヤ「さいこ」ウツツンくく　トあるり囲ひ

ちぐべーくほい「さいこ」ぶちりどから奥ぶ乃品
つぐけでちきよさべまーさやげふのまぜる客人
で大のちんじゅうやうんさ囲そんぶれとと
らぬ客へはとあわくらうよ又かのさそれも
あるりんぐから　トうねいとちんさ　「さいこ」ぶひーいくくぶ大き
むさゆうさねとそでぶちるとぐちふかけ出
しさこくぶまんくらのちくくいさーやーた
トちうれ客とちちりちもひきといもうりるれぐらんこよ
く一分ぐれちうーぶれさくうれはぐきる更くうりあんまも

まかせなさらんかくが息そてくりやうふとんのうへでは寝ころんで
居る客は通人が通なる中へふところにおもろいものを出して
見ると思ひたんとも　ずいぶん　きん
いくらをおろして吸を 客 ホン二きせるでつけれバまず一ぷく
がりでおんなさノウひさしぶりでござ　トこなたから三つぶとん
のうへへきさし紙入をさげて中へたばこ「たばこ」ちやれへ
今中はく一分金をつかみくりひ
くらひおんどうぞ　トまきらしよとのあうさむい
て客の手へとりをかねて中ゝふして
のれなやがて鼻紙のあとさげし金子
一ぺんできんをまんがりの大小を出し 客 これはあぐさ
みなさまらくさがてん中れツレとふきるとまたが大
の月じやこふとるとツレ小の月じやトかくしやく
あるなら二三まいかれバこひこれはあそびのつもりでござる
ぞうもこそうもつきさそてむざかるとおんさるとおもひ
「たいこ」ハイとこれハトりつさおらりちよいとおもそこ
れ男まりがたいこ中し　トもまし とまがんざく けてそげなく
云てくろう客もこれこいおそうとろんでする
さぜんと思ひしこくもあそくぢ 客 アく きん 新ぞうも
げひさそうぬひとりまたり
ちや
女郎
も居もとるね茶をニツぷいのみさいゝのどや
が トこてふべんまりたりふかどちかひホイこれれ
してこころのり佐兵衛のしまうじんとおけ
　ト又床へあのりつくあのだんだんとなるがかれ
とくう だそのんどりたるみとうんどりわくてそこくさ
てあるびみ六十六段のきちまつてんで中は う う 中 よく
らうくとなでりぐとうんぞうつての言あいは よる

あくびをしひでゑせうたゝされ彼是いきなかねさめて
してみれバ前の女がくゑへてむなしくむかふのざしきへ
いつ此間めんさへて皿のごとくなりあかいらいへ名代の客
あるをきゝてさりうせとつさらそふいよてあいよてさそれの
うらふいきんと紳りふかうろさとあんべんもよくしてのまうち
又いあーとをしてしやうどとさらうてさおくがかへびつく
アーして又ねさめりきそれバいりの事て油とつのでも
りそうやこぞくられどてきておきさて常志あるとし屏風ひ
きをのけてこれバ志うきせのよぞれくめり袖まいさら新
そうもいりのあるかう事て枕の引出しとまくらふしさと
こへてそれもそろー鍵のこぶまれをとろしゆうふそさ
ちりをとうこたくつらさいうく緒てみるとかの客つかさい
きせられなでハツロのある　客コレく起きてくれく
こきのたゞとつくれならう
新造　うてうてうくぶれだよちうわくウくフウ五六どん
よこちうせうくウくフウスウ　客コレくとれぞ羽織をだ
しそくれく　羽せう/\きざ付ヲヤ源さんどこへ
お出なんさんへ　客とらひ出しておれハもうかへる羽だ
からひまぶさハツでござんすれ　客ウンニヤたん
時でもよいかへるからくだしてくれろ　羽マアお
まちなんしなどしやとまうらはんさんへ鍛冶屋ら
目をこそりくみそ常れそけさとひざまづらすちらうぶら
らうく出あひらさの女へうくとまうらせしく客へ
ドまんせさんきの引出しをさがしてたくとき出しナ
づくろひしてうけ出てむかふへあひらさのか名代の室

あらうやうにしたんくしひ同めーいまつんぐさ
りのこゝろうれ平氣で居
ちぶん同やうなーいおどれがこんつらのーさか
いやとひあくめざのひびんがあるゲヤ　ふいとね
うねがやうなくさんさ　あとよいふくこのね
アアワくひりのよくれりのとあらさせろちや
屋のくろくとまんてんおぬうるくひるる　同
それぶんても男ぶ　むがくくごぶんとくろいえ
らくらやうさ　同　男ぶもへらまもひくねるん

でもくるそれがおーーぞそれがかるれだが
なんとのふりのぶそくくとくるーとくらうトよひの
むーやくーやたらくもひる同マア　ちぶられーてくん
なんーー外のくくやくく流がやうまーうぶぶんを
男がおんなんとあらちぶんじやうふくーーナン
とかからマアちんつとこ表へお出なんーー同
ア、おいひあんとくらマアおなんーーこトひり　むさい
おひさぶくてやさ
屋の中へくくせ　同　ちんつとくるこひ色ぶョ

トあんそうこうこうひさこうよあのさん去まうでおさ
とぬげさてわうて出し
お宮 イヤくちまんてんたらねくとうても
くらあやたこね 計男 ひさマア 笑ちんしー氏
ぢうもうんちやたんといひしこうおまくへ客
しゆこうん男ひせんはこうあとはあれてあひん
をといひしこどやたひこ トいひたぐらふところ
あげら 宮 伝もこうんくこうこうくこんなもでい
くのどやこひ男こうらのこうのあるならら

一トあとりこうりとのうてこうこうせてなぜこんこん
せんへいうを他人ぐまし ヨトこうぐふ 紙へをこのる 又宮 イヤく
こうてこれいや どやくく 男 名代の客しゆ氏
あくこうこてぬしとゆうこうこうこうあしもの
こ男うて長こうこーぐんむいきもこんなんせん
でや トこ又客の 宮 イヤサこうこあやあうこく
男そのむいきをむよこ去なんこて こ男へ
こんなふこどこひりのぐノウトこ又 うぐこと

圍イヤ　ぐどふあんてるるく　トをる
ある男　ちくちゐ人をらーざョウ　ちくちゐ
きそのまくよと　圍コレいやらーひるのようこそれ
ふとーこそと
うらあやワるひ　男　それわどうりさひ久
ふくひノウトぐれつひさまで　圍　ちくいてくべら
ぐうめサアそんあるあれどどふをる　トのるく
圍遁　ちくちづまくさくびひヲヤぐうらーひ
びかうぶとひさまんしかい
今れうらぐでゆびの勝とあくーさそふざ

評ニ曰ハ夜の合代の客ちづつをうれん
ゆも色男なりちんとうんあれどもたぶのう
ぐ三舎目の客ちてぶ男なり来うれども
ちられさむらい客をびーうをとんて
居ちを西へまづ三舎めれ客をつとあも
ちや廉花の三あもをりてきさ女大
の平氣なりけうちを一あハやうまの耐
ぐりをとへ二分小男相屋の　舎

ヨさ一二銘ハかーなやれくくイン分ハ
あんまの公づけとゆのうちでねうん身
云ゆうら他人うるゆーいとハくまがあるこ
とべうんんなるうさでゆてかのぐんよか
つくらゆいてうんせるうゆるるべーいろる
い人をろうりとさせるふうゆてなろ
く色男にゆれるたちでゆーうゆよ
るゆふゆさをゆたぐんつて出とぐるる友

二ういぢくゆでゆゆくまるくたちなうくろゆ云
ゆくんさてごろーにてくろちの答まする
と又よくさるゆあうむうゆづくくまんーてへ
うくくくれやうなるべー或人曰ゆ身ハハ
銘の白むくも行で又伝のふう源て二つ友
ゆれをとるたちぐとちぐひいちーう其
ゆでいゆうれとうゆ客いろでもたくのし
或人又曰ゆ客ハいげいーやぐ三味ゆんとひく

とかゝるごとくせるで第五人
たりしとゝ
○そんくさるる手中三の女帝女やの二ツい
右草稿出来あり之くとも事繁きれど
繁敏の多くなるんと厭ひ旅色省く
追而後編よ著をべー
○真の手世界い大ゝ世女房ふもらふと
いい女帝ゝらふ客
若者らゝゝ今人陽をゝまひまをゝく上二ツい
ちゝを

あるいゝゝ人ゝのよい女帝中三ゝて歳ハサ二ゝ
日の居づけの考ゝ分ぎまひも
ぎぶぐれぐれ髪のまゝ白ゝのゝんとひき
さゝーちちまゝとして床の中ふゆて居る客十二ゝ
こしふぐゝぐゝていゆゝこのふゆい三男
下ゝのまゝのゝきふひぎゝゝある女けい去メリヤス上畧

ゝゝゝくゝとおゝる日のめゝとゝてあそぶ
武里ヤンヤア客サア一ツのゝふ内い
チトゝいハおゝさん客マアくさゝゝあら上二味
かくて居るぐゝ茶ヤ男つぐ内コフ半根今紙ど
ゝゝいゝ毘沙門孫のゝゝ

女げいしや山谷の毘沙門とちんそうして銘手ものすきなるもちなりこれ廓通いをするトの事　茶や男　客
人の西くサ　げい　フウ　さんこ　盃五合のよくをしてだらとしてくまねとして
ちらつアいく　あさ　ぞうけと木く　云ふ通言なり　げい　伝さあん
だいぐろふこざ　さりやとしてくしの手のぐ
ちさ　トいちちよんぐ　けうるぐれう茶やの男とよ
び出てこれいげいしやよむくいのくんさのすり
げい　ちくぬすり　とーて居る　茶や男　きやくのあのまとモウけく
ーまやせうら客　小声で　うけくしや　茶　ちきふ
モウ　茶　とちまぐ　ぐちこ法よしやちやう　さこ

チト　幕　ホーてもよろしらう　トこれはかーちぐく　茶一こ味せんのこの
ホバッチリ　げい　モシ通ふ糸でござりまちちね
トこのぐうニトニの糸とあるめてちまい茶と　さこ　げい
らうくつきやていちふッ　ちてせりふ　トド
さやうあら出きぐんよよ　さこ　りぐうおいらんお
大事　でくどれなせくーよ　茶　おいらんへかのあげちん
ざよく漬まくくよ　トこいちぐふのちつとよ
ヤやちやう　茶　フウ　トりちさ　客　こんか出ちらう
く　トきやる　ちこ　ハテちくちきあくちこ

茶ヨツトこくうさんて茶中ーこ「ひこ」こうれへ
おせて（トこうく　ゆう中居猫をこそび「茶」盤をを　毎こを
屏風のそこくうぐてこく
ままこつけ太ケのえぐえいーこせの布子の地あけまー
さゆうまようぐこれこうを長袖を常へここここがうぐでの
赤ちとこる
ひふぐこう　なんざといていこうちゃうてあこう
ぜくこうこのせをあやアたこうねくいトき「茶」
松茸い正こついでこりや（トこ茶こう「茶」さけ酒へ
ぐーこうんーひこーいひんざこ「茶」こうちゃう
てこりく居こ（のこ）こうこ居いいこうまざこうあぐた

ぐや「茶」おようあんーこ（トおいこんの魚こ「茶」
こうこりよ「茶」こんあこうこお出ーなんートちゃうこ
ざーここがれ「茶」のこここう「茶」こをを「茶」
こうあぐつぐ「茶」のまこうを「茶」
「茶」袖で灰とあふ　あくぬく気ちぐくぐ（トかこくに
ぐこうこ　これこらうどいートとこを（こここいこれを中
「茶」これこらうどいートとこを（こここいこれを中
こくて多りーこここう白粉とここうこいいまここ
ぐこれのむくをを分ーまいをーこけてあこひまここと
こくて多りーこここう白粉とここうこいいまここ
こひまーーこうどをまモーこへうけこ毛これば出ここ
ぐんあけてこうれを出ー
ここうぐここふでぐこんここねおこのーこみぐこね

うらやましいのヨウ ト云ふ家ら[illegible]いう 花園 山
えまほしくなつてこかる園 山
天くれのいふ所ぐけ[illegible]
ねく[illegible]そこぐちんじつざんをわかとつけれ
て居る女 ふところ[illegible]
糸まわり をぐてこ[illegible]
里ぐぬぬーやァうせうく[illegible]いくるふい
出番の糸でやくそくさ 園 ちうこう
しろとむひておうせるんーねーあやまま
がらぐ仲合上 結 [illegible]
ロるひけどもー云いあ[illegible]
園 刻 いくモウ ト魚をつ[illegible]
ぐくるひるんーぬ[illegible]
したうう分ちるひとを[illegible]
ふんくおちぐんなんーヨウ ト云ふ園 [illegible]
りうしなのそびかせくを[illegible]
モウ あんかろーえ今をあつせくをそうい
のう ト出やく入久 つてちらもの 新遊 發だりうるふやんい
とういべくとを付あい

びらうどのよぎれさ　モシイ　おいらんの新ぞうく〔女郎〕
布子をきて居る　どてらを着て居る〔新〕　モシイ　おいらんの所へ〔女郎〕なんざ
ゆうまいゝ〔新〕　おのね狗山さんがみんなでお
くんなんし　ツサ〔女郎〕あんぞみつくろつておくら
ていきなんしな〔新〕　茶やのおくりおふぞうり
めつわおけふ又きんへ
〔新造〕り味　モシイ　御無心(ごむしん)ながらつてくれ紙を
下さいおくんなんしな〔女郎〕　いつそぜんなさ
くみなをとりつそくろ〔客〕　サアめつていき
みな〔新〕　おありがたふござり　いまそ〔客〕モシ　ト出て行く
おこゑさんおなりせんをきつてきのどくと
どふしなんしたさ〔新〕　廊下揚屋へやし
てとめてよ　△かくてまやこゑとしやうやくの声
おどろかせまするよふにしてけうりくんしてきつと耳をと
すご三味線の新造もぶらぶらさときこえなくまくりせん
のひきませんかへ後かけよりもそろつて二かいとうかへや
こじくあらんまゝののかり　あけ座ふあかつきずのしやうそう与織
屏風の中に二〔客〕コウ　縫助が弟や男乃よめだ
人さしむりに
ぶくまめへみえむひていらさぬかれは羽織を

ぶりてをうらざ男りしんあんぶ
この内の者いそうあふくてなりぬせんよ
あんぞうのぶらぬ頃日ーげ飯食ろうて仮
うどいさとぐうねくいってもあんまりぜん
さんでござんまういちやーくん
てあうんぶん男そふ云れでもあめくそれ
いとうちのぐらざ恩義男仮さお笠なんー頃この
日いたまの新造流ぐいってもいうそ神

がうんとうさそれざうら附金もてくれ
とけてそくうちやロござんせんぶちう
もいうちやあそうのこせで二ぶうんーやく
ぐおそりんしく男そうんちゆうてをけくを
めくのやうこの一ウ口をを云りのハ歩べうけでも
すあびぐあでもなる男ホンニどうれ後ぶり
ぐござんをとく男三十あのうくあるいきの内
ぐーこ二うくなぐりるうちやアれ

ざうち長つづけるのぞそんまア多せうぞちう
まうぐぐ二十や三十は今ふはまるとくいお
れもそうあくいなんてさとずい「女」うむひて
ゆうの考えをべうんぐる在今まで来をう
遊びつけなんしさうら今れ分ふたんく
していさぐおりろくぐんをあくをれを
ても出けんちゆくさぐふそうぐんしゃう
出くあいそうぐ在きんさとく「同」墨痴なる

と云りのぐまぐ山上動転をうして芸者を
見てもてあくと一ッ形よ長れべほんまうぐ
ちうさぐ女帝と云りのハ「女」まぐワさ一ッ女
帝とあんて長なんをとくワちやりう
かくさんよなんさ乳で長まりのをちう
といふびんぐとちんておうんあんをれハ
そうとそんならうう三ちんせうとうちぐ
ひろうれ厄昊をやまべ七まハおうハ

ぜうそうそてかの若人の和ケ〜さ
こまいぐらゐハるくづでごぜんさてかよ
もそのくらゐハくりゐぐごぜんさておくまこ我
うんかよりナんさてくらねーもちくと旅合
ゐるんしてせわてまゐもおやんゐんしぬー
ゆへからワくちぐ身へどふなくてもよう
ごぜんさてよりや年をへてもちんを知さ
罰ホンニそんほどさてよ品くてくれるころ

い犯でもワさてりやアもねくちさげマアなり
さけこくちで旅合してこんゐうからみを
上のお徒よしゆう女ちくともヨイがよう
ぜんよ頃日もゆりを流ぐこくちくとよんで
ちくこくぐと呉見を若いしさが人の呉又で
ゐひさくれるくらゐおならねーをかういん
身よいんせんこくちを孝さ母さんをさく
ぜんくりこ家でごぜんさてゆりのを頃日も母さん

ぐらさていろそ中ぜ（瘦）さといろて涙（なみだ）ところ
しさよ中れ月（ま）でもワらちよいのきれけろ
て居ンさとさハテ（ひ）りせいて上ケぬくとれ
ゆてくらぐくとかく（光焔）ごろうて居こを命（いのち）ま
でいろうもんせんろふ（費）窃（ひそか）ひろ姫（ひめ）終（ひて）りのいろぐ女（ひと）アく（モウ）
いやくいろふつけて頃（ころ）日じゃア一日もよ
くこくを出さふごぐんをホンニねーとろうち
い悪縁（あくえん）とこのでごぐんしゃうよそてお母（かあ）
さんの病気（びょうき）いどうでごぐんをくいろふとう
まぐれてアンせすまんぐひとれぐよ拝（おが）てい
つておくんおんしく堀（ほり）の内（うち）さんのお強護（ごうご）符
を戴（いただき）よんておくさんをさよ入谷（いりや）の鬼子母
神（じん）さんへもかん願をうけんしておとつひ一昨日ら
精進（しょうじん）とんをいろと苦労（くろう）ぐよ窃（ひそか）ろれも
よくくれふ孝（こう）りのぐお袋（ふくろ）の病気も赤
れぐうと苦労（くろう）ぐよにてのうすぐとれるた

流して居るゐどとへホンニよく罷もあ〜ら
ぬのぢ　女　いろく〜ゐるゐと思ひとごろごと
ぢろよちんとも思ふく死さみござんとよ　男ト
のうへ〜ふまくうるさちりつけうこざごろく〜さの
やさ〜こうのかひろのそひの宮のざーたふく〜
三勝ゐ　男　ひさ〜ゐやきりうたうーゆ今
ゐーいゐうねどそれうかさんぢ宮アぐらぶ
ふさひでゐ〜サアく〜ゐのたうのーよし
ゆう今さらいろさうてうもらねるゐぢ女

ホンニそれもそうでござんと今ぐりのぢね
でござんとそねく〜モシへ錦助ぢぬ〜ホねぢろさ
羽織いろうちぢかうらうそらくてやアうん
しゆう宮ウくそんなうマアそふして金て
ろりや　女　ふくゆうねくとえはがりふぢ
ざんとうら宮へんとうきゆく　女　ひてふて　ヤ　ね
しやアねゐんとてうくとさちんしく　トおたの
ゐをゐさ　宮　けなむ　エへシくゆべうちけの
うりる　せすぐう

ぞりとも云ねへ云ねへとト女房いやぢよ沙汰
しやア云ねへよだんよ孫ちんしるサハ同
をのきたんしく トまむ
うらちんと孫うして女そんあら孫まよ
云ちんー トもてう寄こうあまんさそん
ちんねへ孫へとりいひぜーちやアスねへ
コレちんぜらねへよ遂へせうらうぜよひき
女ふぐらひなぜわれさうせそうんちんしう

ト吉の枝の下うよとさ
うと男のうらりうくうひつき
れあとうんせんうらりいうそ若旦ぐよりくよる
おりヨやあつうあーいおーうれなんー ト男の弟とうらて云云
のうくうりぜーぜんも吉
ううさうぐうく食せてうんうり
ゴヲン 作者京傳 ちくしぜんぐうりめま

評 三日傾城よ真ゲあうて運のつとさ右
の寄れやうよあんてあそい癇虫歯のい
うひやうにぐとうもかーれ月代いうう

ふ敬べし山多よりてもゑ能舞はべ
よぶいざ千ぐ中三買の絵ちり玉うし茶
屋へたろくとそ屋ーとふたれへーぐ
ひの中ふ人に人も多くなりみもの合
の四ぐみ多ぐ勇ろけ出てよ
ろとろ面ろよたりいろとろく生裏の
好ふ吟和も好ろとりとの男れ癖と
ぐろろりのたり又い命れ宮武石

勇限くー城て高ろれ絵よい獨宮ろ敬
面ひよ身ぢまろとろ多級花板や
情宮ぐ高て吳又ぢれ多を指ひい
場り世界よい女も男も毛ぢろ多気
よたり愚痴よばろりなりて人だろり
服ぢて者くはけくー面白くー垂ー
女帝れ方ろろもちろと周ふも居
つきたんトふぐ吳又ー宮度

方うちも陸奥かれ宮をたてまつる
やうにおもとおしくやりてとあるぞのち
て如来も海しを羽ひつるひぐ領
さへも答りて役所をもひくたり宮
もうちくうつてもを持佛の阿弥陀
さまもでが如来れ新よえやるものも
何のとかうえんてい馬屋らしくうえ
おもどそのみよたかてふりつもあ

四十八手異本

殘屋もなりてさきうの御洋されを捨が
さえいはたのの迷ひたりと双園乃
あれりのもきしふのうそや

予謝よろこび作れる
此小冊を速藤氏原
時わと仏なりうみ
しるしるしてこそ長
和歌水未
[illegible]氏の
[illegible]哉